

自分と学校との関わり

今、この学校を見つめてみる。
この学校の一員であることを
考えてみる。

全国には
約一万もの中学校があるけれど、
私の学校は、今いるこの学び舎。
この学校の良さや
私と学校との関わりを
もう一度見つめ、考えてみたい。



●私たちの学校の伝統、校風について話し合ってみよう。



この学校に通う日々の中で、
授業やいろいろな活動を通して、
学級や学校の仲間と触れ合い、
学校でしかできない、
貴重な経験を積んできた。

学校は、私たち中学生だけで
成り立っているのではない。
毎日、私たちに向き合ってくれる先生たち、
そして支えてくれる地域の人々など、
たくさんの方々の力で成り立っている。

私たちの生活の中心である学校を
より良い場所にするために、
私たちは何をしたいけばよいのか
考えていきたい。



(7) 学校や仲間に誇りをもつ

学校を良くするために

私たちの学校には「良い所」があり

「良くしなければならぬ所」もあるだろう。

脈々と受け継がれる校風も、

私たちの力で一層輝くものにするのではないだろうか。



●自分の学校について、こうすればもっと良くなると思うこと、これまで取り組んできたこと、これから取り組みたいことをまとめよう。



どの中学校にも、その学校らしさがある。
先輩から受け継ぎ、
後輩に伝えていきたいことは
どんなことだろう。

後輩に伝えたいこと

●後輩に伝えていきたいことを書いてみよう。

1年

2年

3年

column

「旅立ちの日に」

「旅立ちの日に」

作詞 小嶋 登
作曲 坂本浩美

白い光の中に 山なみは萌えて
遙かな空の果てまでも 君は飛び立つ
限り無く青い空に 心ふるわせ
自由を駆ける鳥よ ふり返ることもせず
勇気を翼にこめて 希望の風にのり
このひろい大空に 夢をたくして

懐しい友の声 ふとよみがえる
意味もないいさかいに 泣いたあのとき
心かよったうれしさに 抱き合った日よ
みんなすぎたけれど 思いで強く抱いて
勇気を翼にこめて 希望の風にのり
このひろい大空に 夢をたくして

いま 別れるとき
飛び立とう 未来信じて
弾む若い力信じて
このひろい
このひろい 大空に

● あなたの感じたこと、考えたこと。

昭和六十三（一九八八）年、埼玉県秩父市立影森中学校に赴任した小嶋登校長は「歌声の響く学校を作る」というスローガンを掲げました。当時、小嶋校長は落ち着かない雰囲気の影響中学校を歌の力で変えようと考えていたのです。

小嶋校長と同時に着任したのが、音楽の坂本浩美先生でした。音楽の授業では生徒たちはなかなか口を開こうとせず、教壇の方を向かない生徒もいました。若い坂本先生にとっては、つらい毎日が続いていました。

一学期の半ば、坂本先生は合唱部にコンクールへの出場を提案しました。そこには「歌声の響く学校」というスローガンのもと、「みんなで作るものを作る喜び」を生徒たちに経験してもらいたい、という坂本先生の思いがありました。しかし、合唱部

の部員は女子ばかり十六人。混声合唱のためには、男子の応援が必要でした。その時期に運動部を引退する三年生の男子たちに、坂本先生は「本気でやりたい」と必死に伝え、応援を頼みました。勇気を出して振り絞ったその声は震えていたといいます。そして昼休み、待つていた坂本先生のもとに、男子生徒たちが現れ始めました。中には全く予期していなかった生徒の顔もありました。十数名の男子が、坂本先生の呼び掛けに応じてくれたのです。運動部で活躍した三年生が本気で合唱の練習をしている——その姿によって学校の空気が変わり始めました。「本気で歌うってかっこいい」と他の生徒たちも思い始めました。「歌声の響く学校」のスローガンは少しずつ学校に変化をもたらしたのです。そして月日は流れ、坂本

先生が赴任してきた年に入学した生徒たちが卒業を迎えることになりました。「卒業生に歌を作って贈りたいのですが、詞を書いていただけませんか。」

坂本先生は小嶋校長にお願いしました。しかし、小嶋校長はつれなくこう言いました。「自分は英語の教員だし、詞を作るセンスなんてないよ。」

ところが翌朝、坂本先生が出勤してくると、机の上には紙が置いてありました。それは小嶋校長が作った詞だと分かりました。

「白い光の中に……」

その詞のすばらしさに坂本先生の心は震えました。すぐさま音楽室のピアノに向かうと、「勇気を翼にこめて」の部分から旋律が次々と頭に浮かび、わずか十五分ほどの時間で一気にメロディーができました。こうして生ま



影森中学校の歌碑

「旅立ちの日に」

れたのが「旅立ちの日に」です。その年、小嶋校長や坂本先生をはじめ影森中学校の先生たちが内緒で練習した「旅立ちの日に」が卒業生に贈られました。

今では、卒業式の定番として、全国の学校で歌われている「旅立ちの日に」。生徒に寄せる先生の思い、先輩から後輩へと受け継がれる思い——。「旅立ちの日に」には、そんな思いが宿っているのかも知れません。



私のふるさと

毎日暮らしていると、そこにあるものが当たり前のように感じ、地域の良さを実感することは難しい。しかし、改めて見つめ直してみると、自然、産業、伝統や文化、街並みやそこに暮らす人の思いなど、地域にはたくさんの魅力がある。

- 私が住んでいる地域の良さ、好きな点、自慢したいことを挙げてみよう。

地域の人々の働き

私たちが住んでいる地域の景観を守り、地域を住みやすくし、発展に尽くしてきた先人たちの働きに感謝したい。

- 地域の発展に尽くした人々の働きについて、調べたり、実際にインタビューしたりしたことをまとめよう。

私たちは、地域社会に支えられて生活している。どの地域も、先人たちがその発展を願い、様々な努力を重ねて、今日の姿に創り上げてきた。

都市化や過疎化の中で、郷土意識が薄らいでいると言われることもあるが、実際に地域の行事に参加したり、地域の文化に触れたりすると、大きな喜びを感じることができる。

また、今は郷土を離れて暮らしている人々の心にも、「ふるさと」に寄せるそれぞれの思いがあるだろう。

郷土を愛し、大切にしながら今度は私たちの力で、地域に住む人たちと共に、地域社会をより良いものに発展させていきたい。



ふるさとの発展に貢献する



三重県立相可高等学校では、調理クラブの生徒が、休日に、農産物直売所「おばあちゃんの店」などと連携し、地域の食材を活用した料理を提供する研修レストラン「まごの店」を運営している。地域の住民ばかりでなく、全国からお客さんが集まる人気の店になった。レシピをまとめた本の出版や、地元醸造会社と協力した「オリジナル醤油」など「相可高校ブランド」も開発。

在校生だけでなく、卒業生が惣菜店舗「せんぱいの店」を開業するなど、若者の地域定住にも貢献している。

私たちも地域社会の一員として、過疎化、環境保全、防災など、地域が抱えている課題を考え、住民一人一人がより良く暮らせるようにするためにできることを考えていきたい。

- 自分が感じていることや、家族と話し合ったこと、地域の人々に聞いた話などから、住んでいる地域の課題を考え、自分にできる解決策を考えてみよう。



ふるさとを愛するようになり

今、住んでいる場所を自分のふるさとと考えると、その発展に努めている人がいる。一方で、「ふるさは遠きにありて思うもの」(室生犀星)と言われるように、かつて生まれ育った地域を、遠く離れた場所から、思い続けている人も少なくない。

- 父母、祖父母など家族にふるさとへの思いを聞き、自分の考えたことをまとめてみよう。

message

メッセージ

人それぞれが抱く郷土への思い。平成10（1998）年に福井県丸岡町文化振興事業団が募集し、全国から5万通を超える応募があった「ふるさと」に寄せる短い手紙。その応募作品の中から一部を紹介します。

ふる里よ、ぼくは、君のことは、わからないけど、
君は、ぼくのことわかってるみたい。

13歳・男性

早く出ていきたい。一人で生きて、そして、
いつか必ず帰ってくるんだ。

17歳・女性

何もない そう思ってた あの場所に
全てがあったと 知る今日この頃

17歳・男性

見えるのは、ビルの林に電線の迷路。
都会がボクのふるさと 文句、ありますか？

20歳・男性

帰る度、「変わってないねえ。」とうそぶいて、
変わっていたら、淋しいくせに。

31歳・女性

このままでいい このままがいい それだけでいい
私のふるさと

49歳・女性

●あなたの見つけた言葉、考えたこと。

column

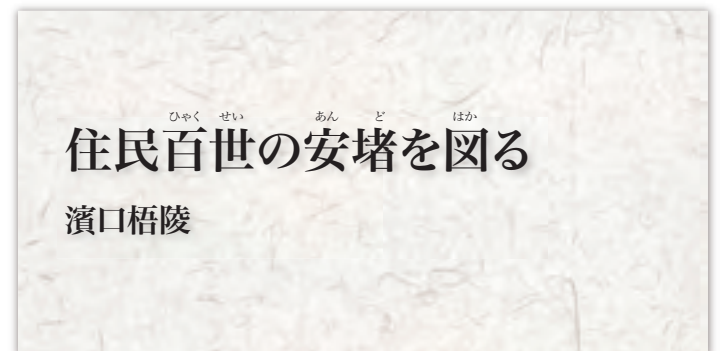
人物探訪

「稲むらの火」という話を国語の教科書や道徳の副読本で読んだことがある人も多いと思います。その話のモデルとなったのが濱口儀兵衛（後の梧陵）です。

一八五四年十二月二十四日の夕方、紀伊国広村（現・和歌山県有田郡広川町）を安政南海地震が襲い、やがて津波が襲来します。儀兵衛は醤油醸造を営む家の当主となりましたが、当時は故郷の広村に戻っていません。この時、儀兵衛は自分の田にあった藁の山に火をつけて、高台の広八幡神社への避難路を示す明かりとしました。この速やかな誘導により、結果として九割以上の村人の命が救われることになったのです。

かつて広村は、海路の要所として大変栄えていました。しかし、一六〇五年と一七〇七年の大地震の津波で大きな被害を受け、以前の繁栄を取り戻せずにいました。その上に今回の大地震の津波で、広村はまたも、壊滅的な被害を受けたのです。

儀兵衛は、村民を助け、人々の離村を防止するために、新たに住居を建て農具や漁具を貸し与えました。さらに、儀兵衛は再び襲ってくるであろう津波から村を守るため堤防を作ることを決心します。老若男女を問わず、工事に参加した者に日当を与え、村人の生活を支えました。一八五五年二月に始まった工事は、村人の力で約四年後に約六百メートルの堤防となりました。儀兵衛は広村の復興と防災のため莫大な私財を投じたのです。この堤防の建設の際に、儀兵衛は「住民百世の安堵を図る」の言葉を遺しています。この堤防は大正二（一九一三）年、昭和十九（一九四四）年、昭和二十一（一九四六）年の津波にも耐え、人々を守りました。



●紀伊国出身。江戸時代から明治時代にかけての実業家、政治家。醤油醸造業を営む濱口家の7代当主。●勝海舟や福澤諭吉たちと交流し、塾を開き人材育成に努めるとともに、種痘所の再興など医学の発展も積極的に支援した。●現在の広川町では、自主防災組織が作られ、避難誘導灯が設置されるなど、梧陵の精神が受け継がれている。



和歌山県広川町にある濱口梧陵の像

濱口梧陵（はまぐちごりょう）1820～1885

私たちは日本の伝統と文化について どのくらい知っているのだろうか

● 学校や地域、日常生活で学んだ日本の伝統と文化について振り返ってみよう。



算額

日本らしさとは…

● 日本の伝統と文化の特徴とは何か考えてみよう。

日本には四季があり、美しい風土がある。
 先人たちは、
 これらに合った生活様式や文化、産業などを生み出し、
 我が国を発展させてきた。
 これらを受け継ぐとともに、
 日本人としての自覚をもって、この国を愛し、
 その一層の発展に努める態度を養っていききたい。

また、日本の伝統と文化は、時代や国境を越え、
 海外からも高く評価されている。

現代に生きる私たちは、
 日本の伝統と文化のすばらしさを知り、
 その良さを受け継いだ上で、
 新たな文化を創造し、
 誇りをもって
 世界の人々にも伝えていきたい。

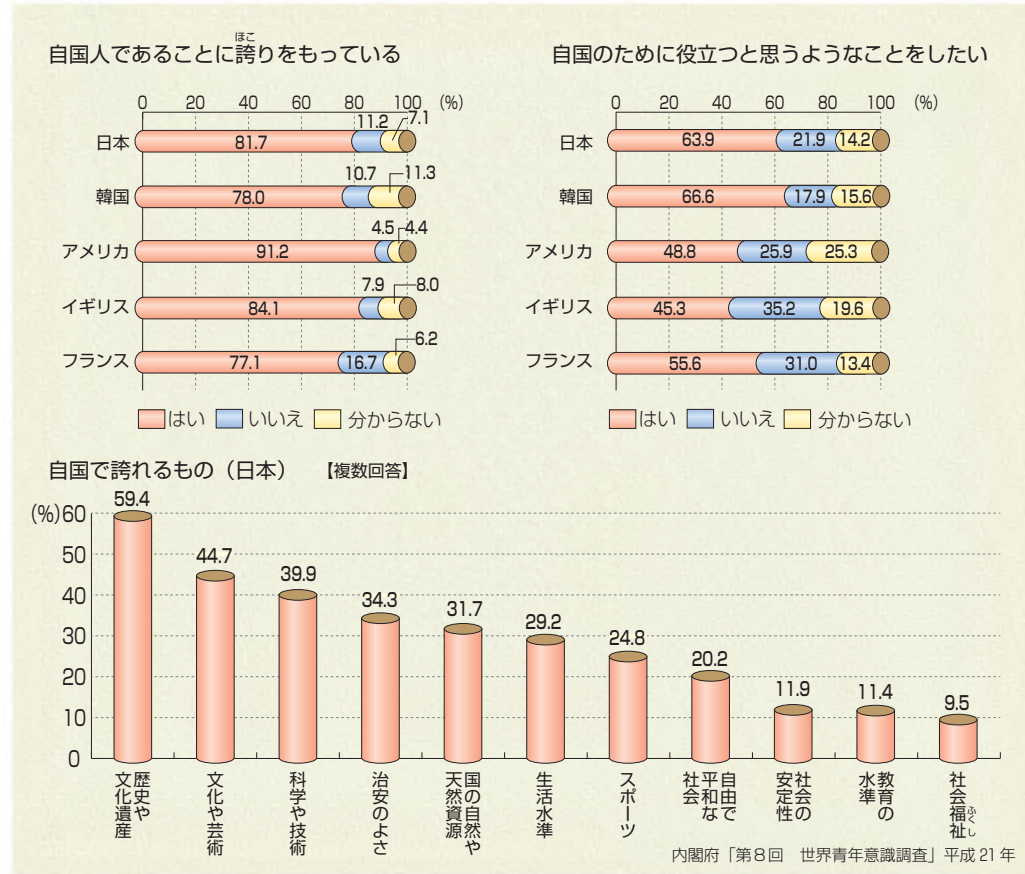


(9) 国を愛し、伝統の継承と文化の創造を

我が国を愛し発展に努めること

ふるさとを愛する気持ちを広げていくと、私たちが暮らすこの国を愛し、その発展を願う気持ちにつながっていく。

優れた日本の伝統と文化を受け継ぎ、新たな文化を創造し、日本をそして世界を発展させるために、何ができるかを考えていきたい。



- 世界の人から信頼され尊敬されるために、私たちにどのようなことが求められるだろう。

海外で親しまれる日本の文化

国内だけでなく海外においても高く評価され、親しまれている。



海外でも高い評価を受ける「歌舞伎 (かぶき)」 ©松竹



近代西洋画家にも影響を与えた「浮世絵 (うきよえ)」



世界で響く日本の音「太鼓 (たいこ)」



「MANGA」は世界の共通語

私が紹介したい日本の文化

- 海外に住む人たちに紹介したい、あるいは後世に受け継いでいきたい日本の伝統と文化の例を挙げてみよう。

saying

この人のひと言

われわれの歴史の中にわれわれの未来の秘密がかくされている。

岡倉天心

■おかくら てんしん (1863~1913)
思想家、美術史家。『茶の本』『東洋の理想』など。

千年の間身にしみこんだ伝統は、
個人のおもわくなんかでは消えないものだ。

白洲正子

■しらす まさこ (1910~1998)
随筆家。『西行』『かくれ里』など。

日本人に日本をもっと知ってもらいたいと思っています。
知らないことは、過度のうぬぼれや卑下を生みます。
世界を目指すには、
まず日本を、そして己れを知ることではないでしょうか。

野村萬斎

■のむら まんさい (1966~)
狂言師。『MANSAI●解体新書』など。

●あなたの見付けた言葉、考えたこと。

column

人物探訪

法隆寺は世界最古の木造建築です。法隆寺が千三百年の歳月を経て今なお健在な姿で建っているのは、法隆寺を解体・修理する「宮大工」の技が途絶えることなく伝承されてきたことが理由の一つです。

西岡常一棟梁は、法隆寺の建物の修理や解体に携わる宮大工の家に生まれ、「最後の宮大工」と呼ばれました。

西岡棟梁は、「法隆寺の大修理というものは私を鍛え上げた先生です。自然のいのちを殺さずに人間の知恵でもって組み上げている。」と語っています。

昭和の大修理は、昭和九（一九三四）年から、五重塔と金堂をそれぞれ十年ずつ、計二十年かけて行われました。創建以来初めての解体修理でした。棟梁は言います。

「それもただ建っているというんやないんでっせ。五重塔の軒を見られたらわかりますけど、さちんと一直線になつていきますのや。千三百年たつてもその姿

に乱れないんです。おんぼろになつて建つてるといふんやないんですからな。」

その理由として抜かすことができないのは、「檜」です。杉の寿命は一千年、松は六百年くらいなのに対して、檜は二千五百年から三千年あるそうです。

「しかもこれらの千年過ぎた木がまだ生きています。塔の瓦をはずして下の土を除きますと、しだいに屋根の反りが戻ってきますし、鉋をかければ今でも品のいい檜の香りがしますのや。これが檜の命の長さです。」

棟梁は、「木の文化は、自然を守る文化からしか生まれません。木を生かすには、自然を生かさねばならず、自然を生かすには、自然の中で生きようとする人間心がなくてはならない。その心とは、永遠なるものへの思いでもある」と語っています。

そこには、自然との調和を重んじ、自然から学び、自然とともに生きてきた日本人の精神と伝統が受け継がれています。



木を生かすには、
自然を生かさねばならず、
自然を生かすには
自然の中で生きようとする
人間の心がなくてはならない。

西岡常一

●奈良県出身。宮大工。法隆寺宮大工の家に生まれ、高校卒業後、宮大工となり法隆寺の修理工事に参加。昭和9(1934)年には棟梁となった。●戦後、法隆寺文化財保存事務所技師代理として法隆寺の解体修理工事に携わる。法輪寺三重塔、薬師寺金堂、西塔、道明寺天満宮などの復元を行い、途絶えていた道具を復活させるなど、寺院建設の技術を後世に受け継いでいる。



法隆寺

西岡常一(にしおかつねかず)1908~1995

真の国際人として世界に貢献したい



© JAXA



© JAMSTEC



国際化が大きく進展する中で、これからの世界をつくっていくのは私たち。我が国や郷土で育まれた伝統と文化について理解を深め、日本人としての自覚をもって、国際社会に貢献していきたい。



© UNHCR/P.Mountzis



日本人としての自覚をもって

世界との関わり

どの国も、他の国や地域と関わりをもたずに存在することはできない。
今日、多くの日本人が外国へ出掛け、多くの外国の人々が日本を訪れている。
既に、私たちの身近な所でも、世界との関わりが深まっている。

日本ーヨーロッパ間の所要時間の変化
1861年 76日間【江戸～パリ】主に船
1924年 120時間【パリ～横浜】小型飛行機
1960年 22時間40分【東京(羽田)～パリ】航空機
(アンカレッジ経由)
2010年 12時間【東京(成田)～パリ】航空機(直行)

訪日外国人旅行者数
約837万人
出国日本人数
約1,849万人
日本政府観光局(JNTO)(平成24年)

●自分の身近な所で世界との関わりを感じることを書いてみよう。

異文化の理解



世界の国や地域には、
その国の自然や伝統に根ざした独自の文化がある。
それは、その国の人々の誇りであるとともに
他の国の人々からも尊重されている。

●世界各地の文化や習慣などについて印象に残っていること、感じたこと、興味があることなどを書いてみよう。

今日、地球規模で物やサービスが生産、消費され、国を越えて人々が行き来し、相互に依存する関係が強くなっている。
また、持続可能な発展のためには、世界の国々や地域が協力して解決することが必要な課題も増えてきている。
こうした時代だからこそ、自国の文化だけでなく、他の国や地域の文化を理解し、尊重し、どの国や地域の人に対しても、公正、公平に接することが一層重要になっている。
世界の中の日本人としての自覚をもち、世界の平和と人類の幸福の実現に向けて、私たちはこれから何を考え、何をすればよいのだろうか。



(10) 日本人の自覚をもち世界に貢献する



写真：Chit Htay / JICA



写真：杉丸勝郎 / JICA

世界に貢献できること

今日、地球上には、戦争や地域紛争、貧困、環境問題など、深刻な問題がある。
 こうした中、様々な国や地域で、多くの日本人が活躍している。
 日本にしながら、様々な国や地域の人々と協力して、
 世界の発展や平和の実現に向けて力を尽くしている人もいる。

- 世界の平和と人類の幸福のために、日本人として、私たちにできることを考えてみよう。

世界が抱える幾多の課題



貧困



地域紛争



原油流出



森林伐採

- 世界が抱える課題や、日本と世界との関わりについて学んだこと、考えたことをまとめよう。

message

メッセージ

みなさんも子供のときから、自分の住む社会や国のことだけでなく、世界各国の情勢についてもつねに関心を持ち続けてください。外国のことを学び、世界中の人たちに対する思いやりを忘れないような大人になってください。

しかも、世界各国は、交通や通信の発達に伴って、相互に補い合っている。けれども、満足に存続することができなくなっています。もともと豊かだと思われている欧米諸国や我が国でも、自国だけで、現在の生活を続けていくことはできません。世界中が平和で、助け合える状況であることがどうしても必要です。

人間がどんな場所、どんな環境のもとで生まれるかは、全くの偶然です。現在の日本のように、いろいろな困難はあっても、衣食に不自由することのない社会に生まれ合わせた私どもは、世界のいろいろな地域で、多くの人たちが貧しさや各種の争いのために不幸な生活をしいられ、日夜、苦勞を続けていることを忘れてはなりません。

中学生のみなさんへ

元国際連合難民高等弁務官
緒方貞子

● あなたの感じたこと、考えたこと。

column

人物探訪

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック開催決定の瞬間、明け方にも関わらず、多くの日本人が固唾をのんでテレビ画面を見つめていました。

一九六四年の第十八回オリンピック東京大会から約半世紀、私たちはまた、オリンピックを目の当たりにすることができません。

一方で、一九四〇年のオリンピック東京大会招致が決定していたことは、あまり知られていません。その大会は戦争のため日本が開催を返上することになるので、この招致に力を注いだのが「柔道の父」嘉納治五郎でした。

「柔能く剛を制す」

明治半ばまで多くの流派が存在していた日本古来の武術「柔術」を、その精神において人間の生き方の「道」と重ね合わせ、「柔道」として体系化した治五郎は、柔

道ばかりではなく、相手を敬い、礼を重んじる日本精神を広く世界に示しました。人間教育にも力を注いでいた治五郎は、その業績が評価され、アジアで初めて国際オリンピック委員会（IOC）の委員に推挙されました。

治五郎には、近代五輪の父クーベルタンが提唱した「スポーツを通して心身を向上させ、さらには文化・国籍など様々な差異を超え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもつて理解し合うこと」で、平和でよりよい世界の実現に貢献する」というオリンピック精神と、自らが説く武道的精神の融合によって、オリンピックを真に世界の文化にしたいという強い思いがありました。

その考えが各国に理解され、従来、欧米だけで開催されてきたオリンピックの東京開催の決定につながったのでした。



オリンピックを真に世界の文化にせねばならない
嘉納治五郎

●兵庫県出身。柔道家、教育者。護身術捕縛術の傾向が強かった柔術を、人間尊重の「道」という思想のもと柔道として統一し、講道館を創設した。●アジアで初めてのIOC委員となり、昭和15(1940)年の東京大会招致に成功(後に戦争のため返上)。●東京高等師範学校などの校長を務め、「精力善用・自他共栄」の日本精神を、西洋のスポーツ文化に紹介することが、世界平和のいしずえになると信じていた。



IOC総会に出席した嘉納治五郎(右から3人目)

嘉納治五郎(かのうじごろう) 1860~1938

「助かった。」

救援機きゅうえんきの車輪くるまわがテヘラン空港の滑走路かっそうろを離れた瞬間しひんかん、私は「ああ、やっと戦禍せんかのテヘランを離れることができた。」と実感した。周りを見ると家族連れの多くは抱き合だって泣いている。

昭和六十（一九八五）年三月、イラン・イラク戦争のさなか、イラン在留の日本人たちは、テヘランから脱出だつしゅつしようとしていた。しかし、テヘラン空港に乗り入れていた各国の航空機は自国民を優先するため、日本人の搭乗とうじょうの余地はなかった。私を含め日本人の全てが不安とあせりの中にいた。その緊迫きんぱくした状況の中で救いの手が差し伸べられた。トルコ政府が取り残された日本人救援のために飛行機を出してくれたのだ。こうして私を

含めた二一六人が無事脱出できた。危機一髪いっぱふだった。

なぜトルコ政府が救援機を出してくれたのか。なぜトルコだったのか。この疑問をもったまま、二十年近くもたったある日、偶然、「イランからの脱出く日本人を救出したトルコ航空」というシンポジウムがあることを知った。私は次の日曜日、予定を変更へんこうして、電車を乗り継いでM市へ出掛けた。

シンポジウムでは、トルコ政府が、飛行機を出してくれた背景に、トルコ人が親日的であることが強調されていた。そして、トルコ人が親日的になった第一の理由として、エルトゥールル号の遭難者そうなんしやを救助

テヘラン
イランの首都。

戦禍
戦争による災い。戦争の被害。



日本経済新聞
(昭和60年3月20日付)

した樫野の人々の話があることを知った。

しかし、親日的であるということだけで、あの危険な状況の中で、自国の国民よりも優先して日本人の救出に当たれるものだろうか。シンポジウムを聞いても、私の疑問は完全には解消しなかった。どうしても樫野に行ってみなければ、エルトゥールル号遭難の顛末てんまつを知らなければならぬと思った。

親日
外国または外国人が日本に好意をもっていること。

顛末
事のいきさつ。一部始終。

和歌山県串本の向かいの大島に樫野はある。今では、巡航船じゆうかうせんではなく橋が架かり車が行き交う。私が妻と一緒にトルコ記念館を訪れたのは春の暖かい日だった。

展示室は思ったよりもこぢんまりしていて、エルトゥールル号の説明、写真や手紙などをじっくりと見て歩いた。しかし、まだ私は納得できず、いささか失望の思いで展示室を出ようとしたところ、出口の所に、分厚いファイルが置いてあることに気付いた。手に取ってみると、『難事取扱二係ル日記』と記されている。当時の大島村村長の沖周おきあかねがエルトゥールル号遭難の経緯けいゐと事故処理について書きつづったものだった。ページをめくってみると、旧字体と片仮名を使ったもので、読みやすいとは言えなかったが、何か分かるかもしれないと思い日記を読み始めた。

しばらく読みふけり、ふと目を上げたとき、館長が声を掛けてきた。

「随分と熱心に御覧ごらんになっていますね。」

「最初は商船だと思っていたのですね。軍艦だとして驚いたでしょうね。救助活動としかるべきところへの連絡、事故処理等すごいですね。」

館長は、何かの研究かと尋ねてきたので、私は、イランからの脱出と、シンポジウムのことを話した。

「そうですか。大変な思いをなさったのですね。」

「でも、まだ何だか分からないのです。なぜトルコの救援機が危険を冒してまで日本人を救出してくれたのか。」

館長は、私の言葉にうなずいた。

「私も、沖日記を読みました。そうした公的な記録と共に、エルトゥールル号遭難時の榎野地区の様子を伝える話もあります。おじいさんやおばあさんから直接、トルコ人救出の話が伝わっているのです。」

あれは、明治二十三（一八九〇）年九月十六日夜のことでした。この大島は串本に近い大島地区、中部の須江地区、そして東部の榎野地区の三つの地区からなっていました。その東部の先に榎野埼灯台というのがあります。話はその灯台から始まったのです。

榎野埼灯台の入り口の戸が激しくたたかれたとき、時計は夜の十時半を指していました。当直の乃美さんが、扉を開けると暴風雨の中から一人の外国人が倒れ込んできました。乃美さんはびしょぬれの外国人を抱きかかえて中に入れ、明かりの下で見ると、服はあちこちが裂け、顔も手足も傷だらけでした。急いで同僚の瀧沢さん呼びました。二人の灯台職員に外国人は、身振り手振りで盛んに何かを訴えます。瀧沢さんはその様子から、海難事故であると分かりました。それで、奥の部屋から万国信号ブックを持ってきてページを繰りながら尋ねました。

「どこの国ですか。」

その男は、しっかりと赤地に三日月と星の国旗を指差しました。それはトルコの国旗でした。

瀧沢さんは、用務員を榎野地区の区長のもとに走らせるとともに、自身はその男の手当てをし始めました。そうこうするうちに、次々と助けを求めるトルコ人たちが灯台にやってきました。

他方、トルコ船の遭難の知らせを受けた榎野の人々は、急いで灯台下の断崖に向かいました。恐怖と疲労のあまり口も利けないトルコ人を、榎野の人々は、両側から支え、歩けない者は背負い、灯台と榎野の村に運び込んだのです。

榎野の人々は、村の家々から浴衣を集めて、トルコ人のぬれた衣服と取り替えさせました。でも、なかなか冷えた体の震えは止まりません。榎野の人々は、一晩中、手や足、背中と体中をこすって温め続けたそうです。

朝までに六十九人のトルコ人が救助されました。

困ったのは、食料でした。榎野地区の人たちは海に出て漁をしていたのですが、この年、漁獲量が減っていましたし、米の値段も上がっていました。だから蓄えた食料もほとんど無かったと言ってよいと思います。

ところが、榎野の人々は、トルコの人たちにありったけの食料を提供しました。

「これでサツマイモは全部だな。」

「ああ、畑には何にも残つたらん。」

そのとき、一人の長老が穏やかに、しかし力強く言いました。

「トルコの方は大勢いなさる。畑のものだけでは足りんから、みんなの家のニワトリをさばくことになるが。……みんな、ええな。」

即座に、赤銅色に日焼けした男が太い声で答えました。

「当たり前じゃ。いざという時のために飼つとるニワトリじゃ。わしらもトルコの方も一緒じゃ。食



▲拡大図

べてもらおうや。」

「そうや、そうや。元気に御国へ帰ってもらいたいからなあ。」

非常用のニワトリを差し出すことに、誰一人難色を示す者はいません。

「榎田さん、コックの腕の見せ所や。頼むで。」

「いやあ、この年で、お役に立てるとは。お母ちゃんたちも手伝うてや。」

榎田さんは、以前に灯台に勤めていた英国人のところでコックをしていたことがあり、専ら調理を引き受けました。ニワトリを追いかけ捕まえる人、サツマイモを洗う人、火を起こす人、椀を運ぶ人、榎野の人々の心尽くしの洋食がたっぷりと振る舞われ、負傷者は元気を回復していききました。

この後、榎野地区の畑には、一個のサツマイモも無く、家に一羽のニワトリも無かったということです。

エルトゥールル号は、トルコ皇帝の命を受けて、答礼として明治天皇に親書と勲章を贈呈するためにやって来ていました。無事任務を果たした特使オスマン・パシャ一行を乗せたエルトゥールル号が榎野埼灯台下で遭難したのです。榎野の海から生還した六十九人は、明治政府の計らいにより軍艦「比叡」と「金剛」によって、無事トルコに送り届けられました。しかし、大多数の乗員は故郷へ帰ることはかなわず、水平線の見える榎野埼の丘に手厚く埋葬されたのです。

トルコ記念館を出た妻と私は、海を右手に見ながら榎野の丘に続く小道をたどった。

「百年以上も前だったのねえ。」

「そうだったんだなあ。」

私の脳裏には、イランからの脱出のこと、先日のシンポジウムのことなどが脈絡もなく浮かんでいた。故国を遠く離れた異境の地で、しかも荒れ狂う嵐の海で、生死を分かっ危機に遭遇したトルコの人

たちと、テヘランの空港で空爆の危機にひんした私たち日本人とを重ね合わせてみた。

私たちは国際的規模の相互扶助によって助けられたことは確かだ。榎野の人々は、ただ危険にさらされた人々を、誰彼の別なく助けたかったに違いない。その心があったからこそ、百年の時代を経てもし色あせることなくトルコの人々の中に、親日感情が生き続けているということであろう。トルコが救援機を出してくれたのも、危機にひんした人々をただ助けたいと思ったからに違いない。私は長年の疑問が氷解していくような気がした。

私は、榎野の海を見た。

「海と空」

それが水平線で一つになっていた。

● 感じたこと、考えたこと。